

1月総評

今月も力作がならんだ。特に惹かれた作品を紹介したい。

処方箋に雪ふりつもる精神科

長谷川柊香 宮城県

処方箋に雪という組み合わせは従来からの抒情とも思えるけれども、敢えて精神科とまで書くことで作品に静けさを呼び込んでいる。処方箋に雪が降りつもるという通常では考えにくい情景が説得力を持つのは、精神科ということばの持つ喚起力かもしれない。

もう何も言うことなく海のほう
ばかり見ていた 海ではなく

白野 新潟県

『海のほうばかり見ていた』という一節に共感する。あなた自身ではなく、あなたのほうばかり見るということは良くあることだから。かなしみはそうした落差のなかにこそ宿るのかもしれない。

伊勢丹の一階みたいな匂いする
ひととお散歩させてください

松下 誠一 東京都

百貨店の一階は、ブランド店や、化粧品がならんでいる華やかな印象があるけれども、敢えて伊勢丹という固有名詞を用いて、より具体的な像を結ぶように作品は構成されている。そんな匂いのするひととお散歩させてほしいという願いは、登場人物のこころの空白を表しているかのようである。

カヌレがどんどん固くなったり柔
らかくなったり、その不品行さが

存在みたい

吉富 快斗 埼玉県

カヌレはフランスの伝統的な焼菓子。表面はカリッと、中はしっとりとした甘さが特徴。そんなお菓子の不品行さを存在とまでいいきるところがお洒落。

春風の待合室になってた3の2

氷丸 茨城県

3の2は教室のことだろうか。春風がその待合室で待つのは誰なのだろう。

今朝の冬半透明の黄の付箋

吉沢 美香 宮城県

冬には半透明が良く似合う。その半透明のくすみは、とおい思い出へとつながっているようである。冬の朝に抱かれながら、付箋のはさんである場所へと、もう一度連れて行ってほしい気にさせられる。

灰暗い駅舎に宿るるるの気

マズルカ 山口県

るるるの気というのは何だろう。少し怖くて、少しかわいい。るるるの気は、ざしきぼっこの息づかいのようなものかもしれない。

ぽたあじゅのたぷんと香る冬初め

篠遠 早紀 東京都

『たぷんと香る』というのとは比喩だけれども、その香りは『ぽたあじゅ』と『たぷん』とが呼びかけ合うことでできたようにも感じられる。香りとともにあらわれる冬初めという季語がうつくしい。

死にたくないなと夜道ひとり
白くて大きなコートを買った

然事 乍 石川県

事故に逢わないようにと、白い服を着たり、白い車に乗ったりすることはあるけれど、死にたくないと思ってそうすることはあまりないように思う。死がそれほどまでに近くにある登場人物の姿こそが、この作品のモチーフとなっている。

春を待つ
はるっておなかすくのかな

にしぎわゆうと 福井県

大人になれば、おおくの人は子どもときの気持ちを忘れてしまうけれども、この作者はそうした大切なものを忘れることはなかったのだろう。「春隣安心したいだけなのに」、「除雪するほどじゃない道努力賞」と、同じ作者のどの作品のことばも全身で喜んでいるかのようである。

雨ですか？
それともサラダスティックは
何もつけずにいく君ですか

志内 悠真 京都府

雨が降っているかどうかを聞く。そして、サラダスティックに何もつけずにいく君かどうかを聞く。どちらの問いも交わらないまま、代わり映えのない日常のことばとして溶けていく。それをリアルに感じるのは、日々の代わり映えのなさを、作者のことばが表現しているからに違いない。